

在来植物の教育と観光での利用

小中学校の花壇で植えられている植物の多くは、インパチエンス(南アフリカ原産)、ベゴニア(南米等が原産)、マリーゴールド(メキシコ原産)、サルビア(ブラジル原産)といった外来植物(外来の種)です。栽培管理がしやすいこと、教科書に載っていることもあり、これらの点では理解できますが、一方で児童・生徒には在来植物に接する機会をもっと提供する必要があります。年配の方が地域の伝統的な歌を子供達に教えようとしたら、歌詞に出てくる植物と鳥がわからないで、この方は伝承が難しいと嘆いていた、という話があります(在来生物の保全は、文化の継承に重要とされています)。小学校では身近な自然環境に親しむこと、また自然環境の保全が学習課題となっています。沖縄県内の各地で本来の自然環境が失われつつありますので、これらの学習課題には十分な配慮をする必要があります。一つの対応策として、校庭に積極的に在来植物を植えたらどうでしょうか。

沖縄県内の公園等でも外来植物が目立ちます。一括交付金の使途として公園整備が進められている所がありますが、画一的な利便さが重要視されているようです。土壌流失を早急に防ぐ必要と苗の調達の難しさによるのでしょうか、整備に多くの外来植物が用いられています。沖縄県民の多くの方には理解し難いかもしれませんが、隆起サンゴ礁の岩・小石は県外の者には、羨ましくて仕方がないものです。元々の地形をうまく利用し、沖縄県でしか見られない植物が咲く在来植物園のようなものをもっと造ったらいかがでしょうか。沖縄の特性を生かした観光資源になります。一方、このような植物園は本来の植生に近いので児童・生徒の学習の場にもなります。

外来植物の観点から見逃されやすい重要な点があります。島に生育する在来種と同種の苗、たねが他の島から持ち込まれて植えられることがよくあります。これらの苗とたねは種としては同じでも遺伝的にかなり異なる可能性が高いので、持ち込みによる問題が生じかねません。特に多くの島からなる沖縄県では考慮しなければいけない点です。公共工事としては、このような植栽は極力しない立場をとるべきでしょう。なお、島由来の植物の植栽は、育苗、種子生産をその島ですることになり、小額かもしれませんが島内の経済にはプラスに働きます。たとえ島内産の苗が高額になったとしても、島の生態系保全のためという理由は高額調達に対して十分な説明になります。